



この鬼畜の
恋態に天罰を!

「ねえカズマ、お金貸して！ ツケ払う分だけでいいからあ！」

キャベツとレタスの区別も付かないほど知力のアワレな女神はかなり切羽詰まっているようだった。明日中に借金が払えないと奴隷同然の傭兵として魔王城近辺の最前線に送られて最低でも三ヶ月は帰ってこれないらしい。

「明日は送別会開いてやんなきゃな」

「五万！ 五万でいいの！ お願いよおおおお！」

日雇い土木作業の日当が五千エリスだというのに日常的に飯くってる酒場で十万近いツケ溜めるとか、こいつは普段どんな酒をガブ飲みしてきたんだろうか。

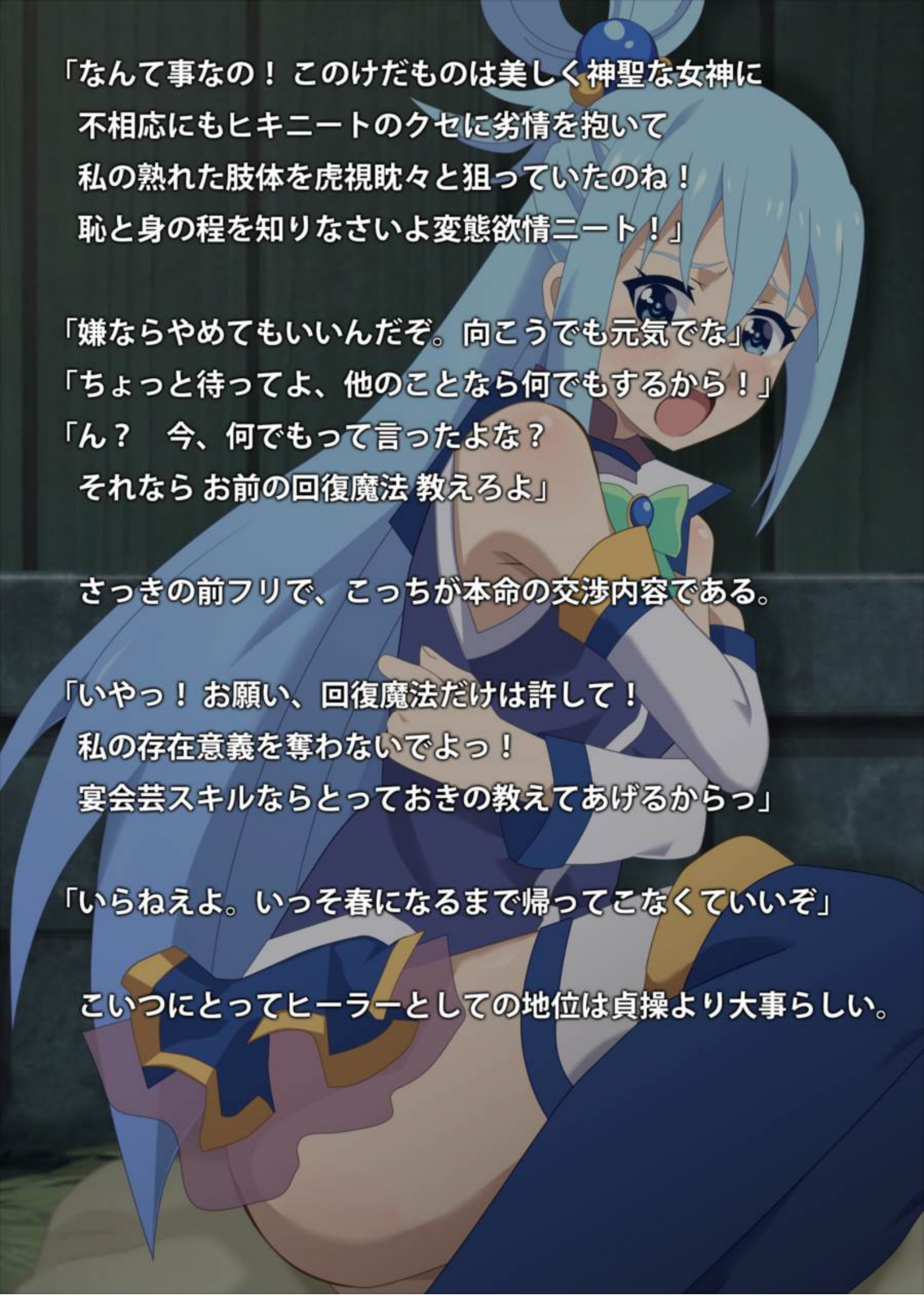
これから冬を迎える準備しなきゃいけないというのにこいつの頭はギリギリスと同レベルなのか。俺は暖房もない馬小屋で凍え死にたくはない。

「馬小屋暮らしから脱出すのにまとまった金がいるからこっちも今ある金でほんとギリギリなんだよ」

「そりゃあカズマも男の子だし、たまに夜中となりでゴソゴソしてるの知ってるから早くプライベートな空間が欲しいのは分かるけどお」

そうじゃない！と説教したいところをぐっところえる。

「知ってるなら話は早いな。それじゃあ、お前がそれを手伝ってくれるんなら五万貸してやってもいいぞ」



「なんて事なの！ このけだものは美しく神聖な女神に
不相応にもヒキニートのクセに劣情を抱いて
私の熟れた肢体を虎視眈々と狙っていたのね！
恥と身の程を知りなさいよ変態欲情ニート！」

「嫌ならやめてもいいんだぞ。向こうでも元気でな」
「ちょっと待ってよ、他のことなら何でもするから！」
「ん？ 今、何でもって言ったよな？
それなら お前の回復魔法 教えろよ」

さっきの前フリで、こっちが本命の交渉内容である。

「いやっ！ お願い、回復魔法だけは許して！
私の存在意義を奪わないでよっ！
宴会芸スキルならとっておきの教えてあげるからっ」

「いらねえよ。いっそ春になるまで帰ってこなくていいぞ」

こいつにとってヒーラーとしての地位は貞操より大事らしい。



「……おいアクア。服は脱いだらどうだ」

「嫌よ。寒いのになんで服を脱がなきゃいけないのよ」

「なんでって、お前ナニするのか本当にわかってんのか？」

ズボンからナニを取り出してアクアに見せ付けてみる。

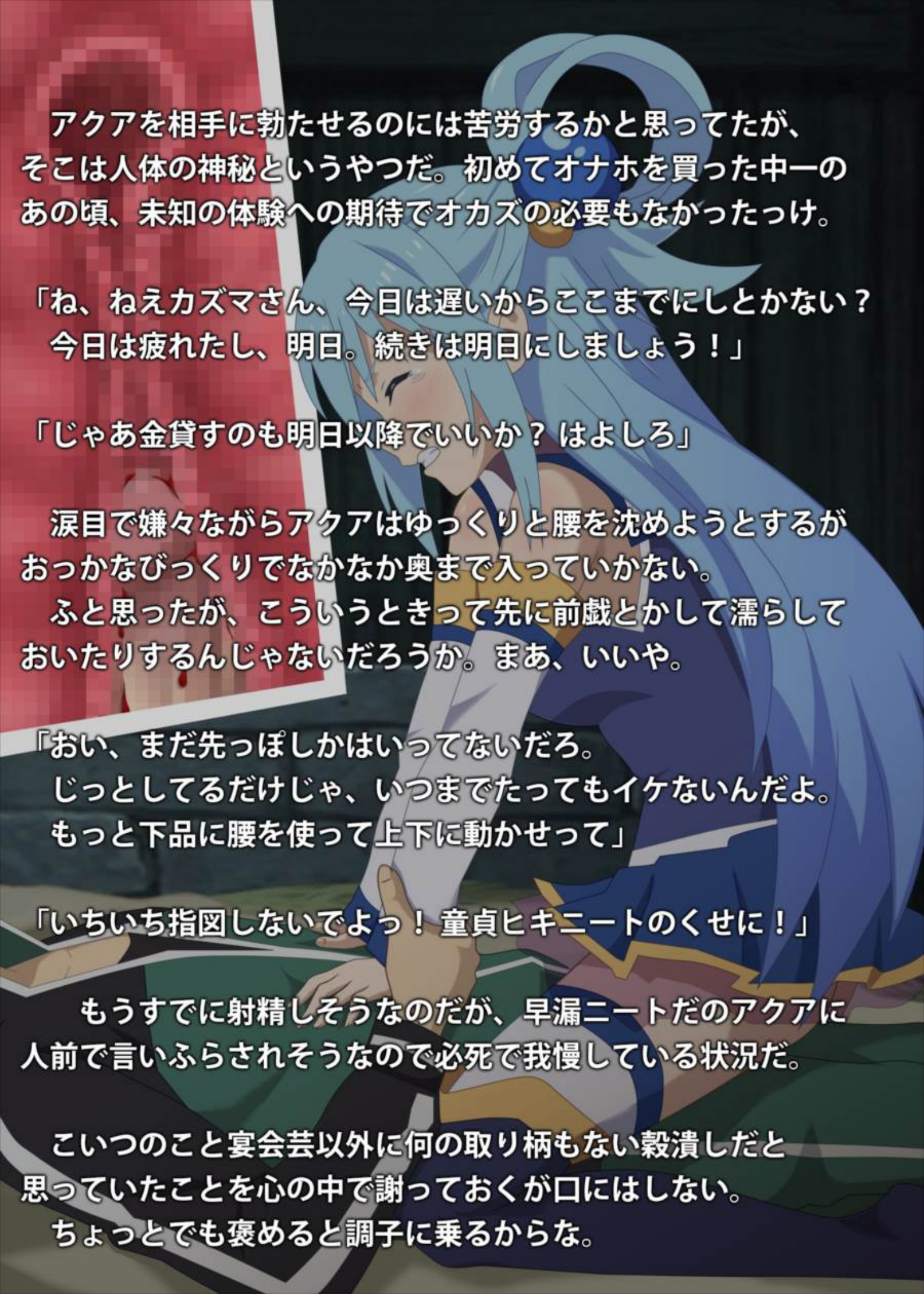
「私を誰だと思ってるの？ アクシズ教の女神アクアよ？
その貧相なモノに激しい刺激を与えればいいでしょ。
一回搾って五万エリスなら二回やれば十万エリスよね？
ほら、さっさと済ませるから任せなさいって！」

そうやって両手をワキワキさせて迫ってくるアクア。

「おい、俺のは未使用の新品で特別繊細なんだからな。
素手で激しい刺激だとか恐ろしいこと言うなよ」

「じゃ、どうすればいいのよ？ 裸足で思い切り踏めばいいの？
靴越したと加減がわからなくて、ちょっと怖いんですけど」

「お前の穴はなんのために付いてんだよ？ 飾りか？
いいから普通に跨がれ」



アクアを相手に勃たせるのには苦勞するかと思ってたが、そこは人体の神秘というやつだ。初めてオナホを買った中一あの頃、未知の体験への期待でオカズの必要もなかったっけ。

「ね、ねえカズマさん、今日は遅いからここまでにしとかない？今日は疲れたし、明日。続きは明日にしましょう！」

「じゃあ金貸すのも明日以降でいいか？はよろ」

涙目で嫌々ながらアクアはゆっくりと腰を沈めようとするがおっかなびっくりでなかなか奥まで入っていかない。

ふと思ったが、こういうときって先に前戯とかして濡らしておいたりするんじゃないだろうか。まあ、いいや。

「おい、まだ先っぽしかは言ってないだろ。

じっとしてるだけじゃ、いつまでたってもイケないんだよ。もっと下品に腰を使って上下に動かさせて」

「いちいち指図しないでよっ！童貞ヒキニートのくせに！」

もうすでに射精しそうなのだが、早漏ニートだのアクアに人前で言いふらされそうなので必死で我慢している状況だ。

こいつのこと宴会芸以外に何の取り柄もない穀潰しだと思っていたことを心の中で謝っておくが口にはしない。

ちょっとでも褒めると調子に乗るからな。

「ったく、しょうがねえなあ」

そう言って一旦アクアにどいてもらう。これで許して貰えたと思いきや、勘違いしたアクアが安堵したような表情を見せたが当然違う。

こっちははち切れんばかりに脈打っているモノを根本までお前にぶちこみたくてウズウズしてるのだ。もう我慢できない。

油断していたアクアに背後から襲いかかって一気に挿入する。びっくりして日本語で表記不能な悲鳴をあげるアクアだが、なんだかチンパンジーの鳴き声みたいで勘弁して欲しい。

「痛い痛い痛いってば！いきなりとかヤメテよ童貞ニート！」

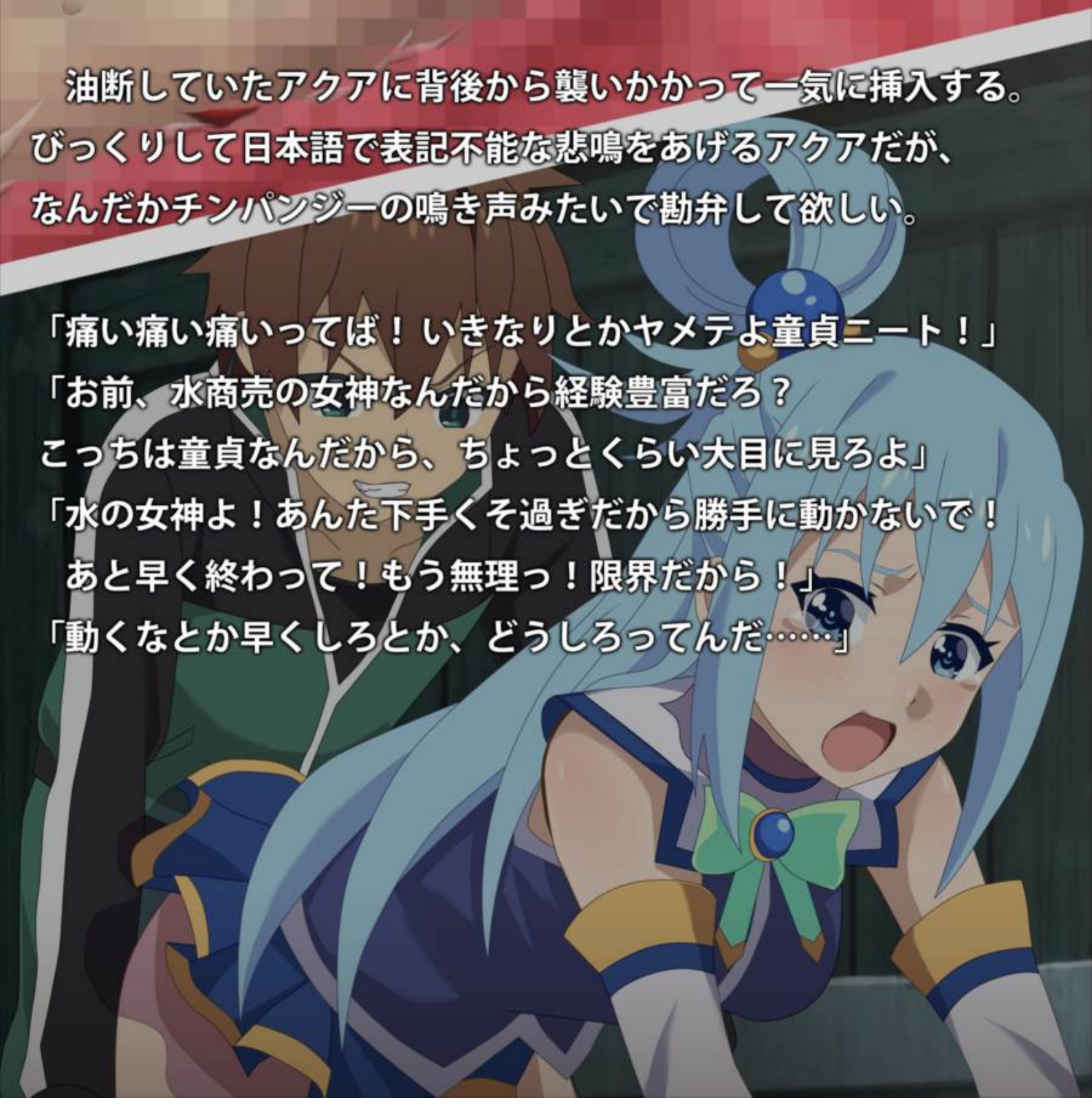
「お前、水商売の女神なんだから経験豊富だろ？」

こっちは童貞なんだから、ちょっとくらい大目に見ろよ」

「水の女神よ！あんた下手くそ過ぎだから勝手に動かないで！」

あと早く終わって！もう無理っ！限界だから！」

「動くなとか早くしろとか、どうしろってんだ……」



「わかったよ、お前のワガママ聞いてやるから感謝しろよ？」

アクアに密着し、一番奥深いところで盛大に膣内射精。
今まで生きてきて最も気持ちの良かった瞬間かもしれない。

生ハメで童貞卒業の上に中出しできるなんて素晴らしい。
このふざけた世界に無一文で放り込まれたことを恨みもしたが
そんな荒んだ気持ちがアクアの胎内に溶け出していく。

明日からはもうちょっとだけ優しい自分になれる気がした。

「あれっ？ ね、ねえ、カズマさん……？」

なに身震いしながら賢者モードになってるの？

なんかお腹の中で気持ち悪い液体が拡がってるような
感じがするんだけど、これってきっと気のせいよね？

オシッコ漏らしたとか言ったらゴッドレクイエム喰らわすわよ」

「やだなあ、お漏らしとか子供じゃあるまいし安心しろよ。

精液に決まってんだろ。一週間ぶりで最高に濃いやつだ！」

「はああっ！？ あんた女神の子宮をなんだと思ってんの？
次世代の女神を産み育むための神聖な領域なのよ？
ヒキニートの遺伝子垂れ流していい場所じゃないの！
マジで罰当てるわよ、この強姦クソニートっ！」

「は？ 女神って子供できるの？ なら先に言えよオイっ」

デキたらシャレにならんのだが。こいつは液体を水にする
変な特技を持ってたので問題ないだろうと思ってたのに。

てっきり生でやらせてくれるから中を出していいもんかと。
そういえば、そもそもこの世界に避妊具ってあるのだろうか。

アクアはブレッシングで自分の幸運値を底上げすることで
着床を防げるはずとか言い出したが、アクアの考えることは
まずロクなことにならないだろうから慌てて止めさせた。

翌日。こないだ仲間になった1歳の子相手に朝から
避妊の方法について尋ねるといふセクハラトークをかます。

ブレッシングには子供が授かりやすくする効果があるらしく
不妊治療の一環でも使われる魔法だったとか。危ねえ。

めぐみんからアクシズ教のプリーストの知り合いを紹介して
もらい、浄化魔法の処置がギリギリで間に合ったのだった。

いつも商売が上手くいってない貧乏店主のウィズだが、リッチーである彼女はレアな固有スキルを持ってるらしい。

ウィズの魔道具店で働いてる変な仮面を被った店員がこっそり教えてくれたのだが、唇同士の接触を通じて相手を一時的に魅了や隷属の状態にするというものだとか。

そんなわけでウィズの元を訪れたわけだが、ウィズはスキルを教えるのを渋るので交渉は非常に難航した。

ドレインタッチや不死王の手のほうが実戦的ですよ？と別のスキルを必死に勧めてきたがスキルポイントは限られている。レベル上げしてないので余分なものを覚える余裕は全くない。

仮面の店員の話によるとスキルは唇同士の接触だけでなく生殖器同士の粘膜の接触でも発動できるということ。是非そのやり方でスキルを教えて欲しいと半ば冗談のつもりで言ったら、ウィズが必死になってそれだけは堪忍して下さいと本気で懇願されてしまう。軽く受け流して欲しかったのだが。

人が真面目に交渉してる最中、アクアが店にやってきた。こいつはちよくちよくここに遊びに来て営業妨害しているらしい。なんとなく「毎日この狂犬女神をけしかけてやろうか？」と口にしてみたらウィズが涙目になり、あっさり承諾してもらえた。ウィズは本気で困ってるようだ。後でアクアに注意しないとな。

うなだれるウィズに薄暗い店の倉庫に案内して貰ったわけだがなぜか一緒に付いてきたアクア。ウィズにはこれから服を脱いでもらうわけだが、アクアにじっと見られていては恥ずかしいらしい。

「カズマってばモテないからってアンデッド相手に援交とか本気？ 屍姦趣味とか異常性癖過ぎて超どん引きなんですけど……変な病気になるから絶対やめたほうがいいわよ！」

役立つかもしれないスキルを教えて貰うだけなのに援助交際とか勘違いも甚だしいが、スキルの有用性をこいつに一から説明するのも面倒だ。

「病気ならお前が後で治療魔法でもかけてくれればいいだろ。それにもうあの変な仮面の店員に百万エリス払った後だしな」

「この私の貞操がたった五万エリスだったのにビッチーに百万エリスとかありえないんですけど！ 頭おかしいの？ カズマは馬鹿だから気付いてないのかもしれないけどあの店員って実は悪魔なのよ！？ カモられてるのよ！！ カズマさんが田舎者だからボッタクろうとしてるんだわ！」

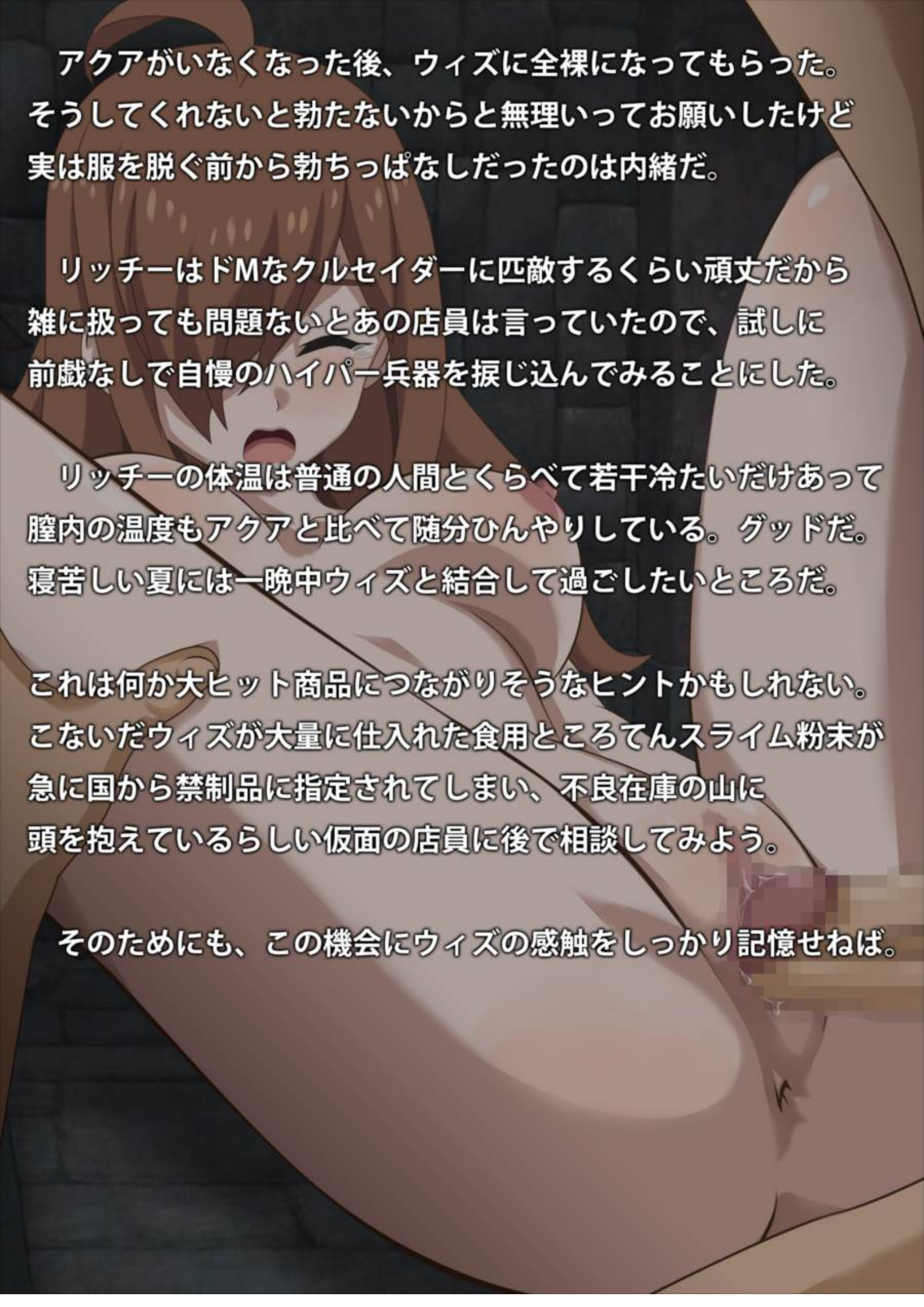
「前も言ったが、あの五万エリスは貸しただけだからな？」

「やだもー、カズマってば冗談ばかりー！ くすくす」

「五万チャラにして欲しかったらお前の回復魔法教えろよな」

「嫌ーっ！ 回復魔法だけは嫌！ それだけは死んでも嫌よおおお！」

アクアは泣きながら走り去っていった。静かになって丁度いい。



アクアがいなくなった後、ウィズに全裸になってもらった。そうしてくれないと勃たないからと無理いってお願いしたけど実は服を脱ぐ前から勃ちっぱなしだったのは内緒だ。

リッチーはドMなクルセイダーに匹敵するくらい頑丈だから雑に扱っても問題ないとあの店員は言っていたので、試しに前戯なしで自慢のハイパー兵器を挿し込んでみることにした。

リッチーの体温は普通の人間とくらべて若干冷たいだけあって膣内の温度もアクアと比べて随分ひんやりしている。グッドだ。寝苦しい夏には一晩中ウィズと結合して過ごしたいところだ。

これは何か大ヒット商品につながりそうなヒントかもしれない。こないだウィズが大量に仕入れた食用ところてんスライム粉末が急に国から禁制品に指定されてしまい、不良在庫の山に頭を抱えているらしい仮面の店員に後で相談してみよう。

そのためにも、この機会にウィズの感触をしっかりと記憶せねば。

「痛っ、そんな乱暴にしないでください！ もっとゆっくり……。それと、こんなに深く入れなくても大丈夫ですからっ」

苦痛に対し耐性あるはずのウィズが苦悶の表情を浮かべている。接触面積は僅かでもいいとは聞いていたけれど、ウィズの粘膜との密着感を高めようとしてうっかり処女膜まで破ってしまったらしい。

ウィズが処女という話は聞いてなかったのでこれは不可抗力だ。知ってたなら嫌がられる前に一気に根元まで挿入してたところだ。

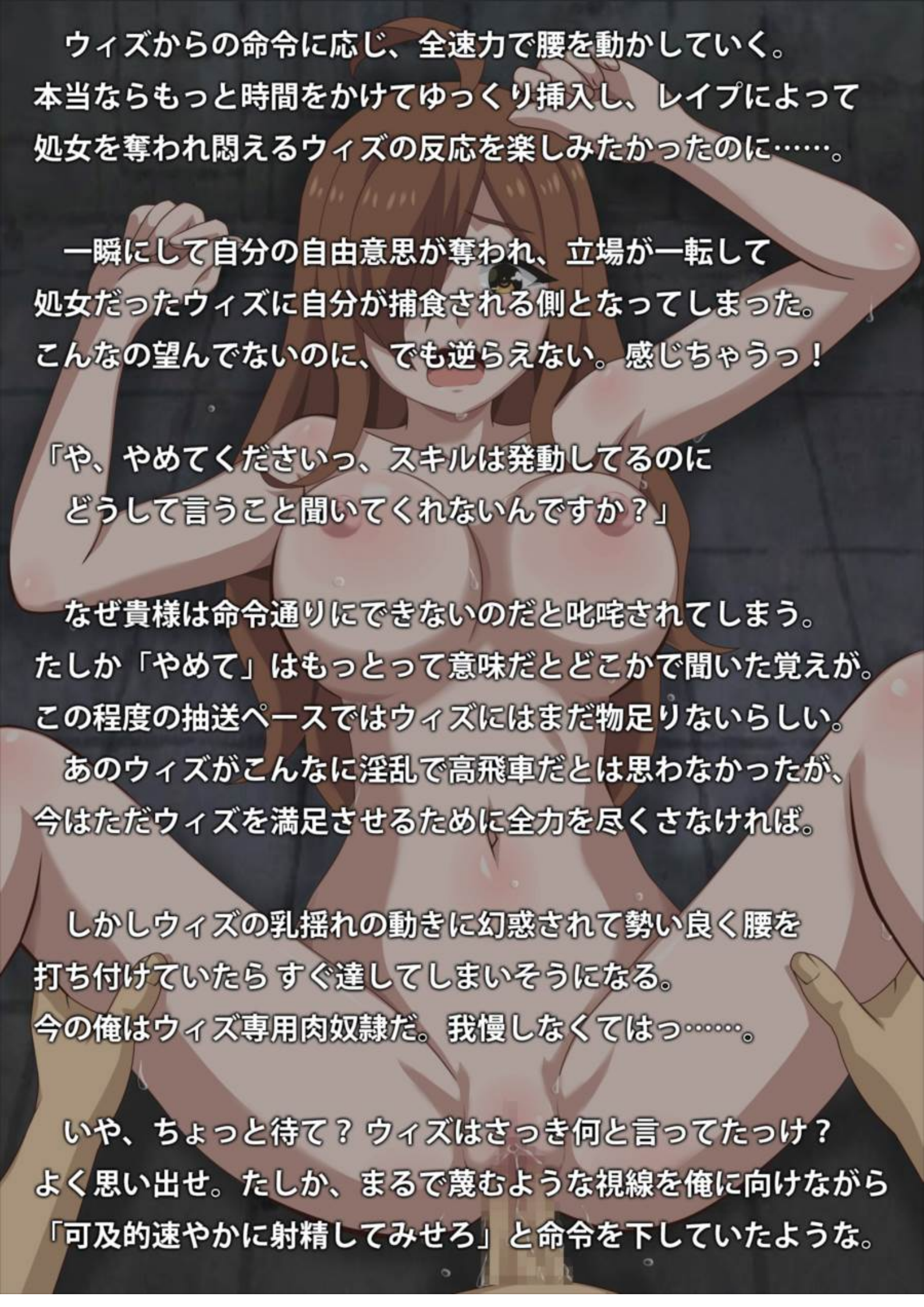
前人未到の領域をまだ半分ほど残しているけれど、さすがにウィズの制止を無視するわけにはいかない。そんなことしたらただのレイプになっちゃうからな。ウィズには嫌われたくないし。

それにしても、ウィズには生前の性交経験が皆無だったらしい。この薄幸リッチーには生の喜びを教えてあげなければならない。急に自分の中にウィズに対して奉仕したいという欲求が芽生える。

「……スキルを使いました。これでスキルを習得できるはずです。ですから、あの、もう早く抜いてもらえませんか……」

「わかったよウィズ、速くヌケばいいんだな」

「え……？ ちょっと、カズマさん話を聞いてっ、いやあああ！」



ウィズからの命令に応じ、全速力で腰を動かしていく。
本当ならもっと時間をかけてゆっくり挿入し、レイプによって
処女を奪われ悶えるウィズの反応を楽しみたかったのに……。

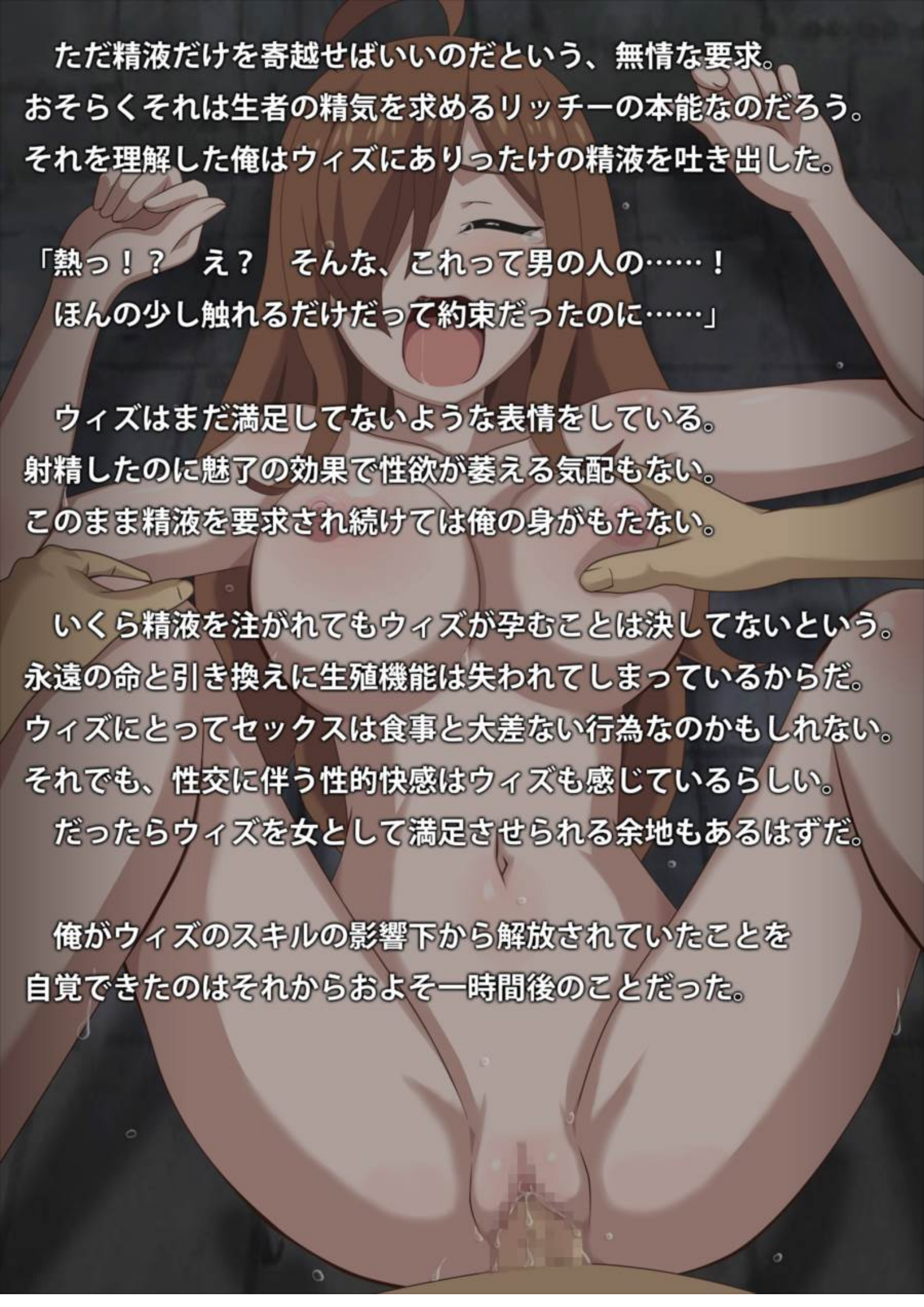
一瞬にして自分の自由意思が奪われ、立場が一転して
処女だったウィズに自分が捕食される側となってしまった。
こんなの望んでないのに、でも逆らえない。感じちゃうっ！

「や、やめてくださいっ、スキルは発動してるのに
どうして言うこと聞いてくれないんですか？」

なぜ貴様は命令通りにできないのだと叱咤されてしまう。
たしか「やめて」はもっとなんか意味だとどこかで聞いた覚えが。
この程度の抽送ペースではウィズにはまだ物足りないらしい。
あのウィズがこんなに淫乱で高飛車だとは思わなかったが、
今はただウィズを満足させるために全力を尽くさなければ。

しかしウィズの乳揺れの動きに幻惑されて勢い良く腰を
打ち付けていたらすぐ達してしまいそうになる。
今の俺はウィズ専用肉奴隷だ。我慢しなくてはっ……。

いや、ちょっと待て？ ウィズはさっき何と言ってたっけ？
よく思い出せ。たしか、まるで蔑むような視線を俺に向けながら
「可及的速やかに射精してみせろ」と命令を下していたような。



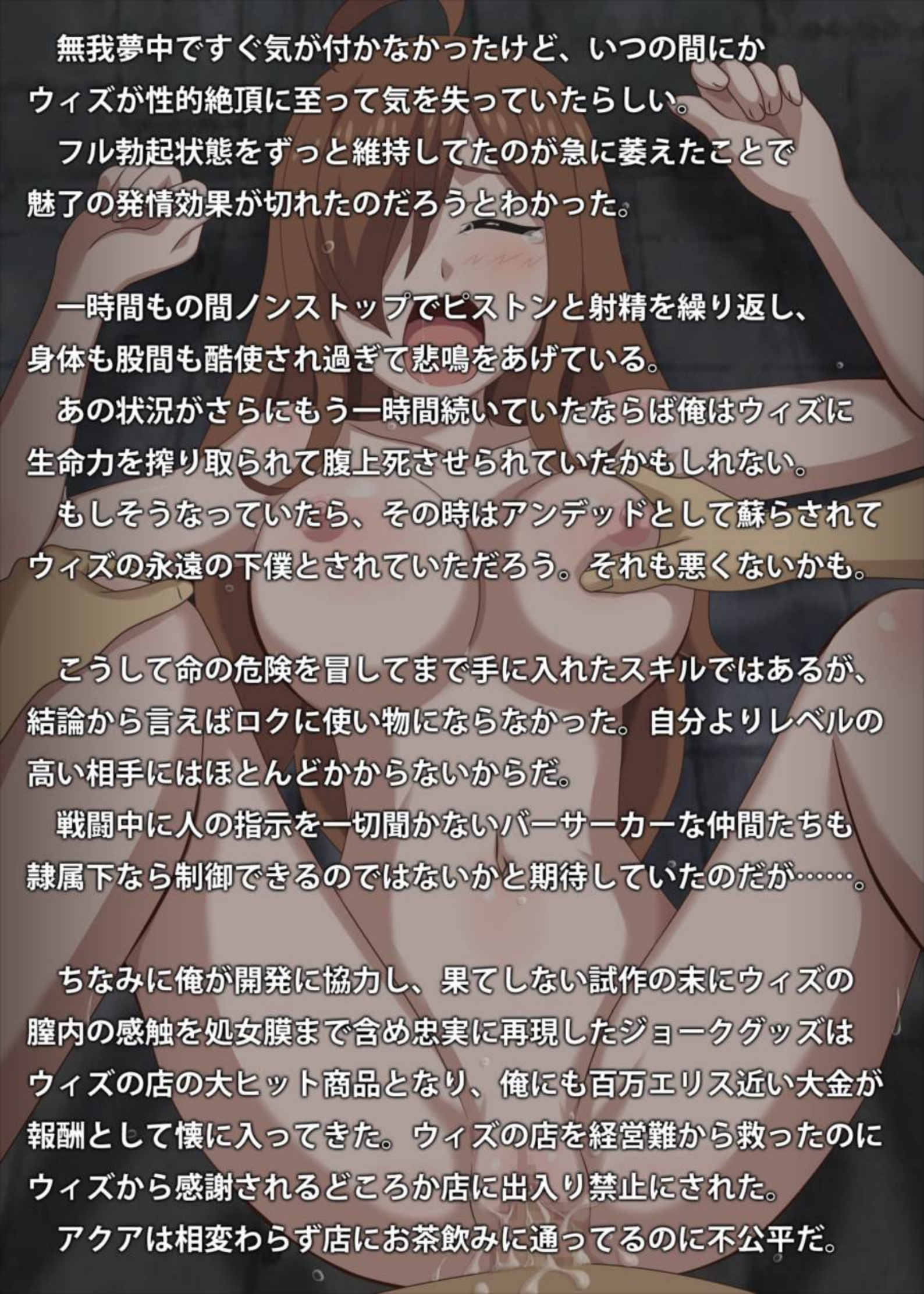
ただ精液だけを寄越せばいいのだという、無情な要求。
おそらくそれは生者の精気を求めるリッチーの本能なのだろう。
それを理解した俺はウィズにありったけの精液を吐き出した。

「熱っ！？ え？ そんな、これって男の人の……！
ほんの少し触れるだけだって約束だったのに……」

ウィズはまだ満足してないような表情をしている。
射精したのに魅了の効果で性欲が萎える気配もない。
このまま精液を要求され続けては俺の身がもたない。

いくら精液を注がれてもウィズが孕むことは決してないという。
永遠の命と引き換えに生殖機能は失われてしまっているからだ。
ウィズにとってセックスは食事と大差ない行為なのかもしれない。
それでも、性交に伴う性的快感はウィズも感じているらしい。
だったらウィズを女として満足させられる余地もあるはずだ。

俺がウィズのスキルの影響下から解放されていたことを
自覚できたのはそれからおよそ一時間後のことだった。



無我夢中ですぐ気が付かなかったけど、いつの間にか
ウィズが性的絶頂に至って気を失っていたらしい。

フル勃起状態をずっと維持してたのが急に萎えたことで
魅了の発情効果が切れたのだろうとわかった。

一時間もの間ノンストップでピストンと射精を繰り返し、
身体も股間も酷使され過ぎて悲鳴をあげている。

あの状況がさらにもう一時間続いていたならば俺はウィズに
生命力を搾り取られて腹上死させられていたかもしれない。

もしそうなら、その時はアンデッドとして蘇らされて
ウィズの永遠の下僕とされていただろう。それも悪くないかも。

こうして命の危険を冒してまで手に入れたスキルではあるが、
結論から言えばロクに使い物にならなかった。自分よりレベルの
高い相手にはほとんどかからないからだ。

戦闘中に人の指示を一切聞かないバーサーカーな仲間たちも
隷属下なら制御できるのではないかと期待していたのだが……。

ちなみに俺が開発に協力し、果てしない試作の末にウィズの
膣内の感触を処女膜まで含め忠実に再現したジョークグッズは
ウィズの店の大ヒット商品となり、俺にも百万エリス近い大金が
報酬として懐に入ってきた。ウィズの店を経営難から救ったのに
ウィズから感謝されるどころか店に出入り禁止にされた。

アクアは相変わらず店にお茶飲みに通ってるのに不公平だ。



こないだはウィズに操られて逆レイプされた後遺症で巨乳は向こう一週間くらいはいらぬという感じ。

今は貧乳の女の子に癒やされたいという気分である。

そんなわけで今晚はサキュバスの出張サービスを利用してみた。三時間の最長のコースで値段はたったの五千エリスである。

指名したのは店でみかけた小柄な子。体型的には1■歳のめぐみんと大差ないようだが、めぐみんよりは胸が若干ありそう。

希望したシチュエーションだが、サキュバスの女の子が結界魔法に捕まって困っているところを助けることでお礼にエッチなお返しをしてもらえぬというプレイ内容にした。

夜中、風呂からあがって自分の寝室に戻る途中の廊下に身動きとれなくなっているサキュバスの女の子が待ち構えていた。

「あれ？もう来てたんだ。じゃ、さっそく始めようか」

「それでは今から三時間、よろしくお願いします」

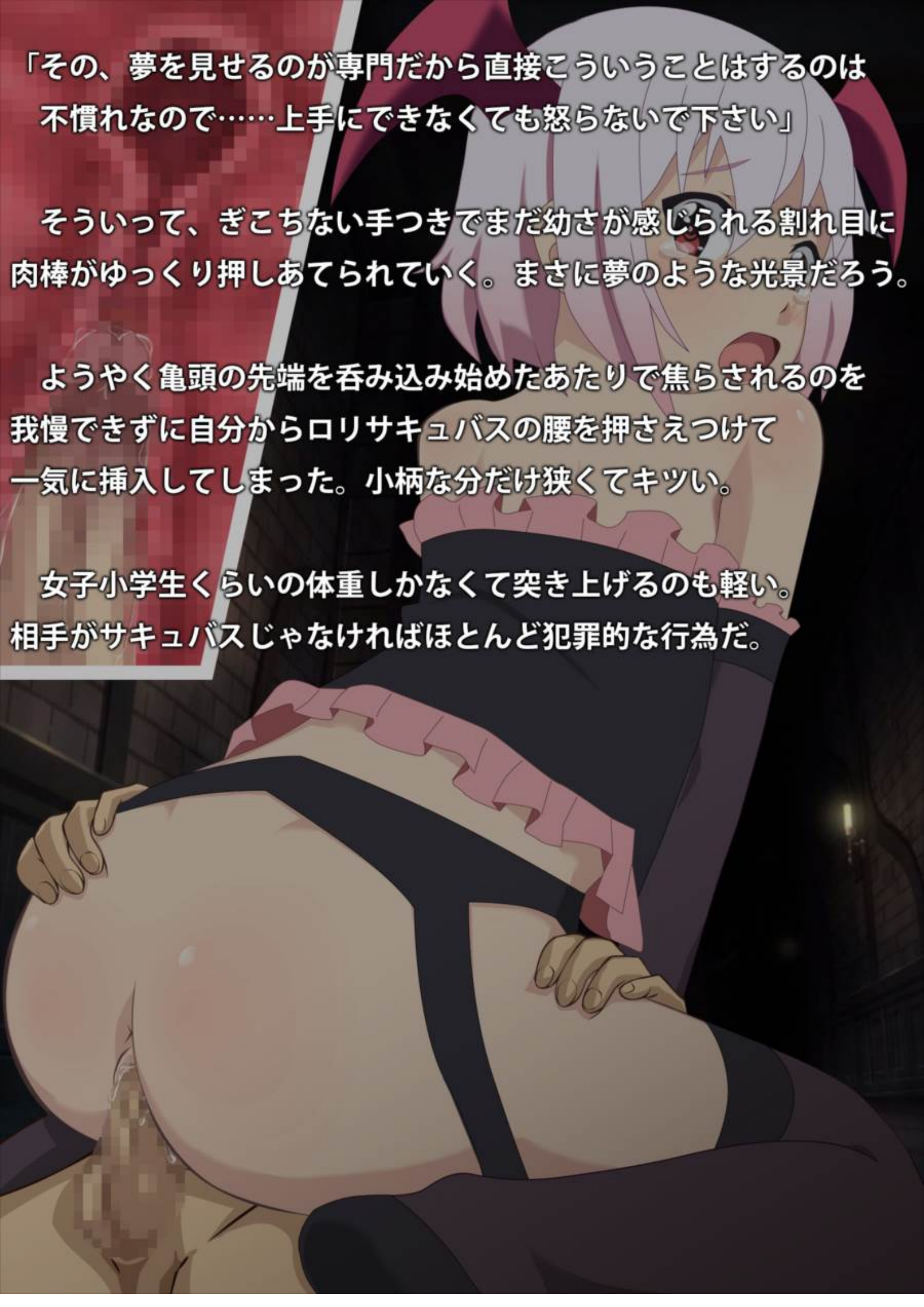
時間を測るための時計は自前のものを用意しておいてある。店側が用意する時計を信用するほど俺は不用心ではない。稀少な三時間。延長もできない以上、無駄にはできない。

「あ、お客さん、ちょっと待って下さい！
あの、何か勘違いされてませんかっ！？
ウチはそういうお店じゃないんです！！」

「騒がしくしたら仲間のアーケプリーストが起きてしまうぞ。
助かりたければ静かにしているほうが身のためだ。
生きて帰りたいなら、どうすればいいかわかるよな？」
「うう……」

おっと、いかんいかん。事前の会話も楽しむつもりだったのに実物の子を目の前にしたら ついつい気が急いでしまってまるで脅迫してるような台詞になってしまったじゃないか。自分の台本無視して絶対、変な客だと思われてそうだ。ここは余裕をもった対応をしていかないといけない。

よし。ここは全裸になって床に寝転がるとしよう。廊下の床が冷たくて固いが、だからこそこは自分が下になっておくのが紳士の振る舞いというものだろう。

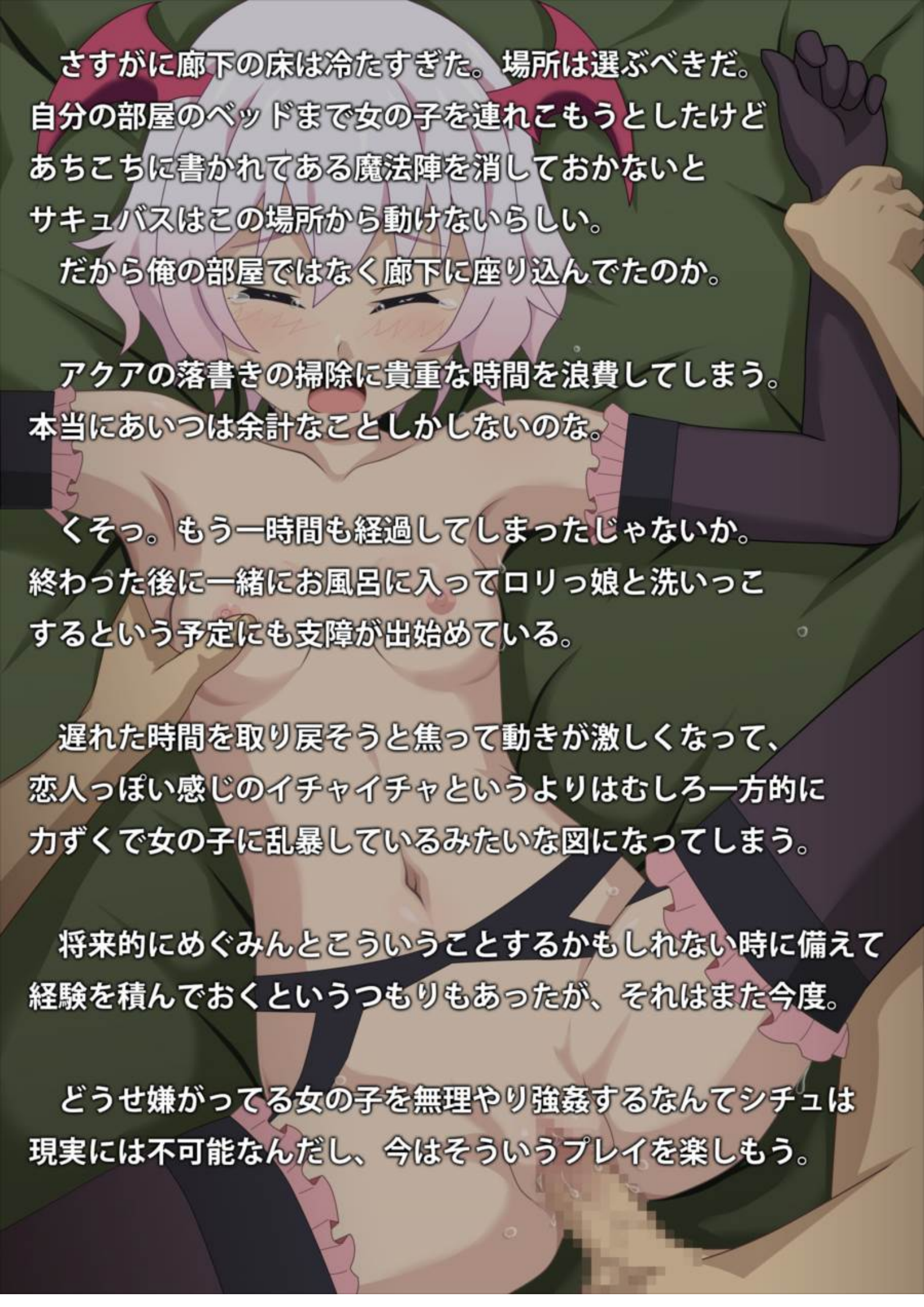


「その、夢を見せるのが専門だから直接こういうことはするのは不慣れなので……上手にできなくても怒らないで下さい」

そういつて、ぎこちない手つきでまだ幼さが感じられる割れ目に肉棒がゆっくり押しあてられていく。まさに夢のような光景だろう。

ようやく亀頭の先端を呑み込み始めたあたりで焦らされるのを我慢できずに自分からロリサキュバスの腰を押さえつけて一気に挿入してしまった。小柄な分だけ狭くてキツイ。

女子小学生くらいの体重しかなくて突き上げるのも軽い。相手がサキュバスじゃなければほとんど犯罪的な行為だ。



さすがに廊下の床は冷たすぎた。場所は選ぶべきだ。
自分の部屋のベッドまで女の子を連れこもうとしたけど
あちこちに書かれてある魔法陣を消しておかないと
サキュバスはこの場所から動けないらしい。

だから俺の部屋ではなく廊下に座り込んでたのか。

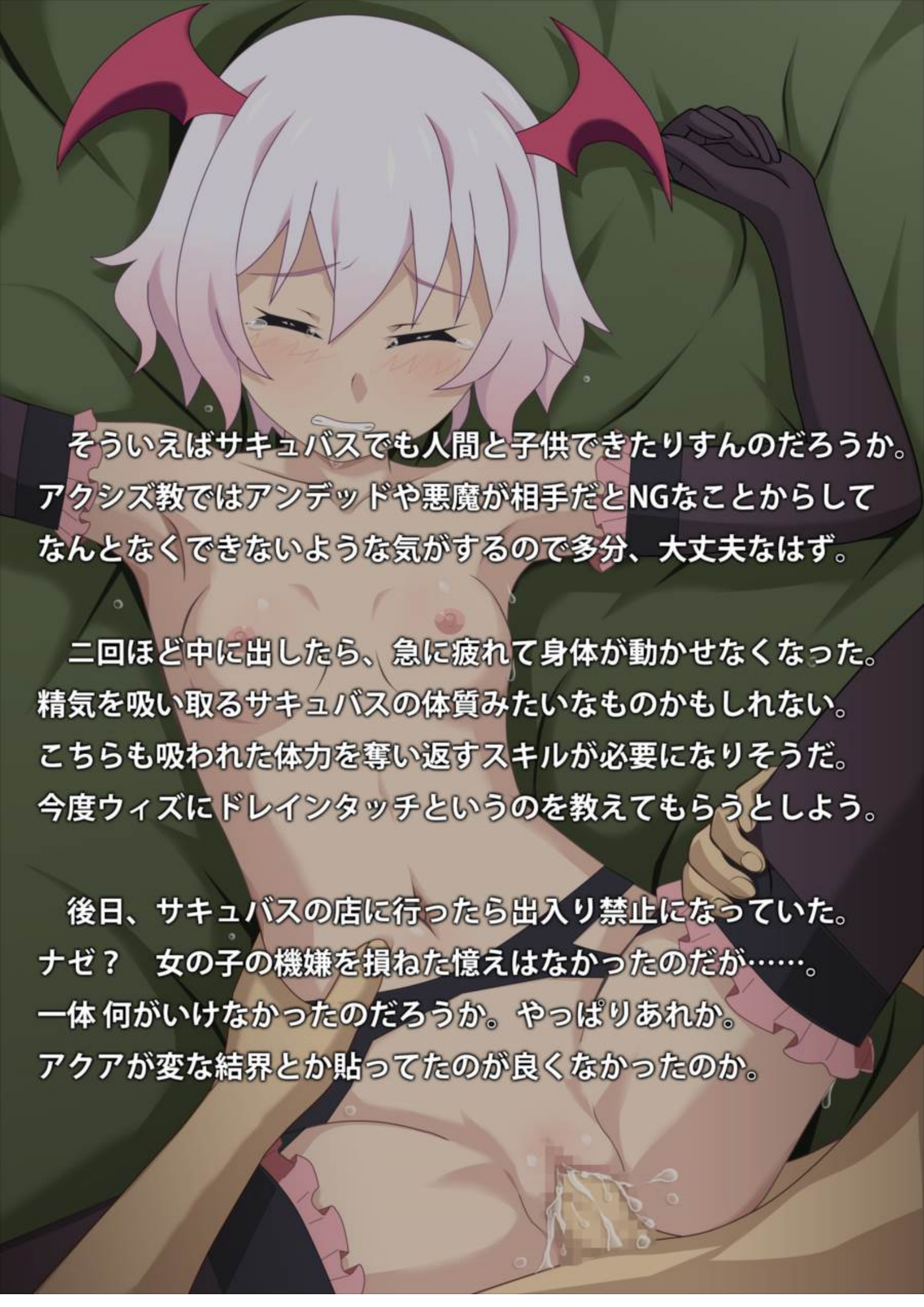
アクアの落書きの掃除に貴重な時間を浪費してしまう。
本当にあいつは余計なことしかしないのな。

くそっ。もう一時間も経過してしまったじゃないか。
終わった後に一緒にお風呂に入ってロリっ娘と洗いっこ
するという予定にも支障が出始めている。

遅れた時間を取り戻そうと焦って動きが激しくなって、
恋人っぽい感じのイチャイチャというよりはむしろ一方的に
力づくで女の子に乱暴しているみたいな凶になってしまう。

将来的にめぐみんとかこういうことするかもしれない時に備えて
経験を積んでおくというつもりもあったが、それはまた今度。


どうせ嫌がってる女の子を無理やり強姦するなんてシチュは
現実には不可能なんだし、今はそういうプレイを楽しもう。



そういえばサキュバスでも人間と子供できたりすんのだろうか。アクシズ教ではアンデッドや悪魔が相手だとNGなことからしてなんとなくできないような気がするので多分、大丈夫なはず。

二回ほど中に出したら、急に疲れて身体が動かさなくなった。精気を吸い取るサキュバスの体質みたいなものかもしれない。こちらにも吸われた体力を奪い返すスキルが必要になりそう。今度ウィズにドレインタッチというのを教えてもらおうとしよう。

後日、サキュバスの店に行ったら出入り禁止になっていた。なぜ？ 女の子の機嫌を損ねた覚えはなかったのだが……。一体何がいけなかったのだろうか。やっぱりあれか。アクアが変な結界とか貼ってたのが良くなかったのか。

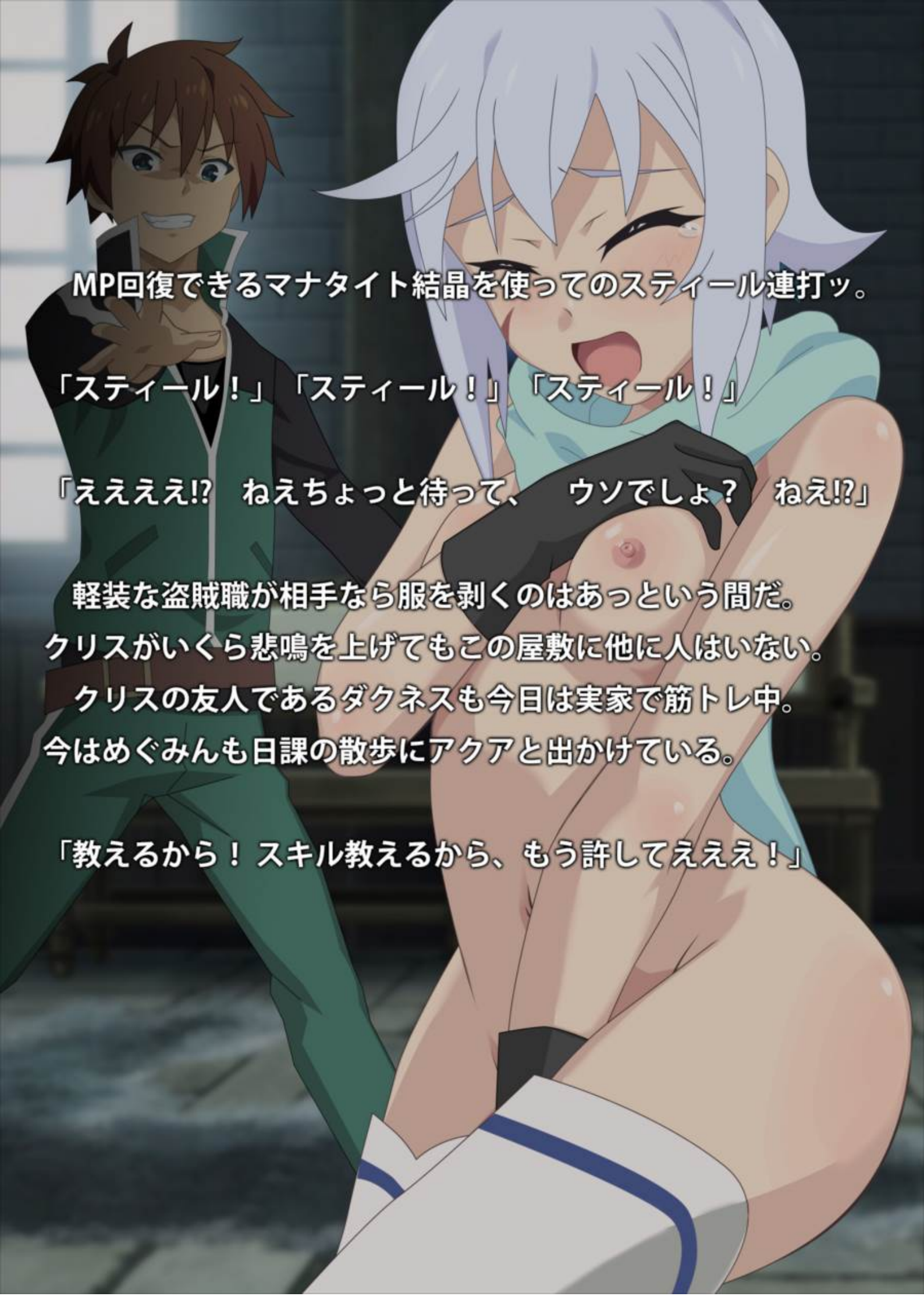


盗賊系のスキルにバインドという便利なものがあるらしい。今日はそれを盗賊のクリスから教えてもらおうと思ったのだが、スティールを悪用するような人には教えられないの一点張り。

こないだスティールを教えてもらったときに下着盗んだことをまだ根に持っているようだ。あれは幸運な事故だったというのに。

クリスによってパンツ脱がせ魔などという風評被害を流されて冒険者ギルドの女性達から白眼視されて心を痛めていた俺はクリスに対し復讐することを誓ったのだった。

真にスティールを悪用するとはどういうことか、今からその身に教えてやろう！ くらえええっ！



MP回復できるマナタイト結晶を使っのスティール連打ッ。

「スティール！」 「スティール！」 「スティール！」

「ええええ!? ねえちょっと待って、 ウソでしょ? ねえ!?!」

軽装な盗賊職が相手なら服を剥くのはあっという間だ。
クリスがいくら悲鳴を上げててもこの屋敷に他に人はいない。
クリスの友人であるダクネスも今日は実家で筋トレ中。
今はめぐみんも日課の散歩にアクアと出かけている。

「教えるから！ スキル教えるから、もう許してえええ！」

「や……やめろよお……」

覚えたばかりのバインドをクリスに試してみた。いい眺めだ。前から気になっていたんだがクリスの性別はどっちなのだろうか。クリスはひょっとしたら男の娘かもしれないという疑惑があるのでいい機会だからこれをじっくり調べてみることに。

「んー……、クリスは遊びまくってそうだからちょっとグロいかと覚悟してたんだけど、意外と綺麗な色してるのな」

明るい場所で女性器をじっくり観察するのは初めてかも。ここは人間も女神もあんまり違いは無さそうな気がする。

「ねえ、もう十分でしょっ！」

よく考えたらアクアもウィズも人間じゃないんだよなあ。アクア曰く、ニートと女神じゃセックスにはならないからノーカンドとかいって人のこと相変わらず童貞扱いだ。アクシズ教じゃ異種姦はオナニーの延長の扱いだとかで。

「よし。クリスにお願いして童貞卒業させてもらおっかな。」

「ええええ!? ねえちょっと待って、ウソでしょ? ねえ!?!」

「ただまー」

丁度、めぐみんを背負ったアクアが帰って来た。

「おう、おかえりアクア、めぐみん」

「あ……アクアさん！アクアさん、助けてええええ！」

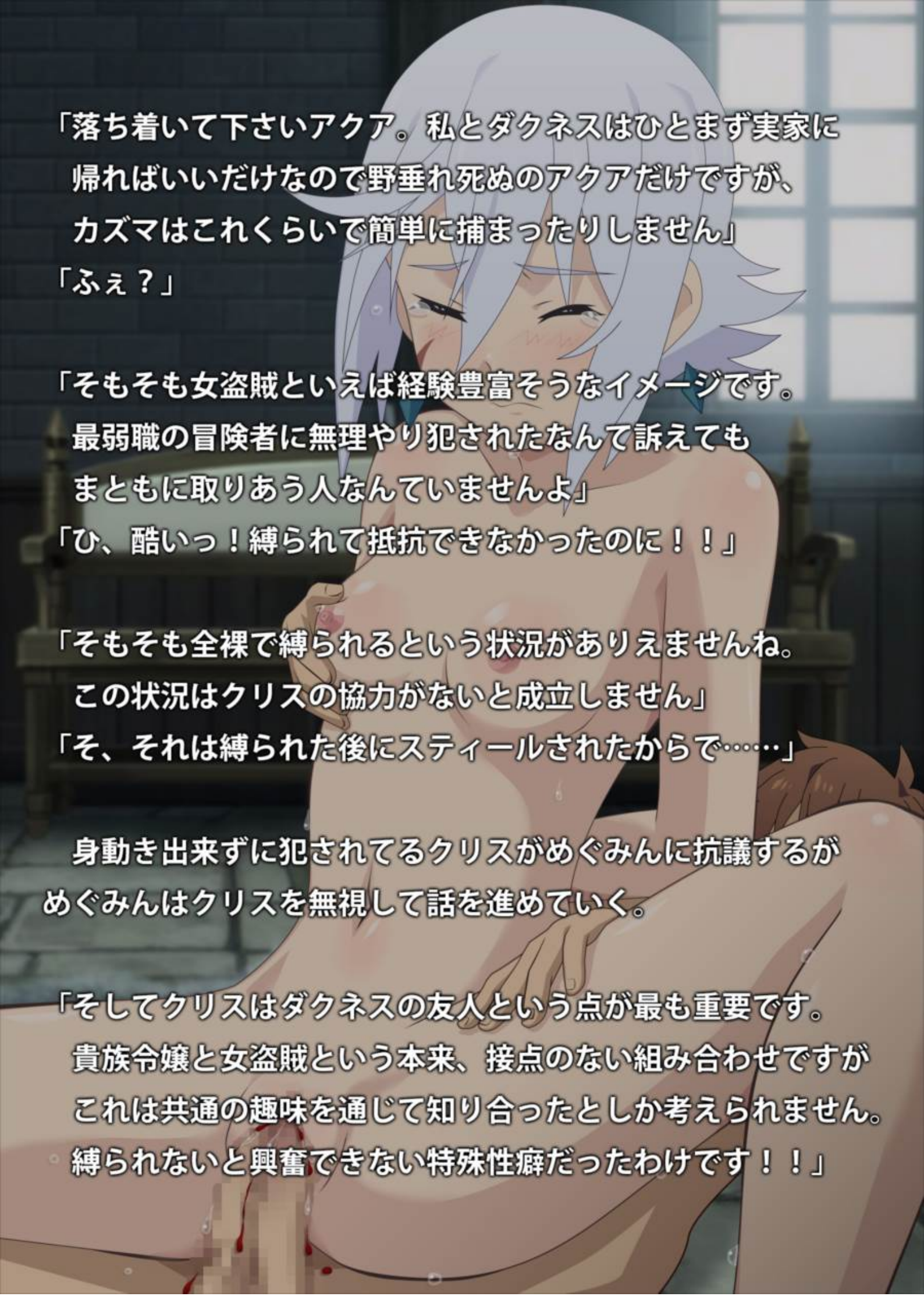
レイプ目で放心状態でだったクリスがアクアの姿を見て急に大声で叫び始める。びっくりさせないで欲しい。

「え……？カズマさん、昼間から一体ナニしてるの……？」

「女の子を全裸にして拘束した上で強姦しているようにしか見えないのですが、この変態とうとうやってしまいましたね」

めぐみんが人聞きの悪いことを言うが、ちょっと反論しづらい。

「ど、どど、どうしよう、めぐみん？カズマさん性犯罪者だよ？カズマさんが捕まっちゃったら、このおうちどうなっちゃうの？もう冬なのにこの家から追い出されたらみんな死んじゃうっ！ニートだからっ、そんな当たり前のこともわからなかったの？いやあああ！カズマさん、なんてことしてくれんのよおおお」



「落ち着いて下さいアクア。私とダクネスはひとまず実家に帰ればいいだけなので野垂れ死ぬのアクアだけですが、カズマはこれくらいで簡単に捕まったりしません」

「ふえ？」

「そもそも女盗賊といえば経験豊富そうなイメージです。最弱職の冒険者に無理やり犯されたなんて訴えてもまともに取りあう人なんていませんよ」

「ひ、酷いっ！縛られて抵抗できなかったのに！！」

「そもそも全裸で縛られるという状況がありえませんね。この状況はクリスの協力がないと成立しません」

「そ、それは縛られた後にスティールされたからで……」

身動き出来ずに犯されてるクリスがめぐみんに抗議するがめぐみんはクリスを無視して話を進めていく。

「そしてクリスはダクネスの友人という点が最も重要です。貴族令嬢と女盗賊という本来、接点のない組み合わせですがこれは共通の趣味を通じて知り合ったとしか考えられません。縛られないと興奮できない特殊性癖だったわけです！！」

「ちょっ、あたしは違うからっ！そんなんじゃないってばあ！」

「二人が合意の関係であったことは既に証明されました」

頭の良いめぐみんは面倒は避けることに決め込んだようだ。ダクネスの性癖は世間には知られてないし、ダクネス自身も否定すると思うのでロジックとしてはガバガバではあるのだが。アクアはさっきの説明で納得したらしい。

「クリスとダクネスがそんな趣味してたなんて意外だったわ。人って見かけによらないのね。

エリス教の行き過ぎた禁欲主義による反動かしら……？」

「だからダクネスと一緒にしないで！」

「それはそれとしてクリスが嫌がってるのは見過ごせないわ。相手があまりにも下手くそで期待外れでキモければ当然よね。ほらっ、この童貞ニート。いい加減クリスから離れなさい！」

いや、童貞ならこうしてクリスに捧げたわけなんだが。あとニートはお前だろうが。

「まだしつこくセクハラするならゴッドブローが火を吹くわよ」

アクアがいきなり強気になって俺の邪魔をしにきた。

「わかったよ、今すぐクリスの縄ほどくからちょっと待ってる。
……ん？ 結び目が見えないけど、どうなってんだコレ？」

クリスの身体を引き寄せて縄を引っ張ってたりしてみるが
その度にクリスの膣奥に肉棒が深く嵌まり込んでしまうだけだ。

「やっ、もう縄は後でいいから、早く手を放してってば！
アクアさん、ブレイクスペルっ！ ブレイクスペル使って！」

「暴れんかって、あと少し、もうちょいだから……ウツ」

こちらの不自然な鼻息に不穏な気配を察したクリスが
身を振って逃げようとしたので反射的にそれを押し留める。
その際に局部が擦れた刺激によって射精してしまった。

「ちょっと待って!? ウソでしょ？ 出てる、なんか出てるっ！」

驚いたクリスが精液の流入をくい止めようとするかのように
膣内深くに刺さってる肉棒を締め上げてくるが逆効果だ。
射精の勢いがさらに増し、一滴残らずに絞り尽くされる。

